

新世紀人文学研究通信

発行日：2025年12月28日

New Century Humanities Research News／新世纪人文研究简报／新世紀人文研究新聞／신세기 인문학 연구 뉴스／ข่าวการวิจัยมนุษยศาสตร์แห่งศตวรรษใหม่／Berita Penelitian Humaniora Abad Baru…

編集 新世紀人文学研究会 〒813-8503 福岡市東区松香台2-3-1

九州産業大学国際文化学部 酒井順一郎研究室 superfunkyjun@yahoo.co.jp

発行 亜細亜総合企画工房 〒353-0005 埼玉県志木市幸町1-7-17 hiroshitanaka724@gmail.com

【ごあいさつ】

2025年はさまざまな事案満載の一年だった。世界重大ニュースを見ればトランプ政権による相互関税に世界中の国々が翻弄され、一方ロシア・ウクライナ戦争は一向に解決の兆しが見えない。双方の背後には「支援」国があり、いわば代理戦争の様相を呈しているからである。たがいに交渉の駆け引き、相手をうかがいながら四年が過ぎている。国際的な安全保障体制がここまで急激に変化したのも珍しい。自国は自国で守らざるを得ないという感情が色濃くなってきた。そうした中、9月に中国を訪問した。4年ぶりに山東大学で開催された国際シンポジウムに参加するのが目的だったが、とくに渡航日が9月19日だったため、おりから抗日戦争勝利80周年に合わせて『731』、『南京写真館』などの抗日映画が封切られていたこともあり、北京空港から北京南駅までタクシーで移動する時間はしばし緊張した。同行者（愚妻だがこの時ばかりは賢妻）は韓国から来たの、と言って事なきを得た。

いつどこで強制的に下車を命じられるか分からぬ、薄氷を踏む思いだった。

シンポジウムは小規模で行われ、日中間の学術交流までが自粛されていることにやや失望せざるを得なかつた。その後、青島キャンパスに移動し、別のフォーラムに参加したが、遠方から参加した学生たちも多く見られた。その一方で、与えられた責務を誠実に、真摯に果たしている教員、学生の姿を見て救われる思いがした。かつての活況が一日も早く戻ることを願わざにはいられない。

国内に目を転ずれば、戦後八十年、昭和百年の節目の年に、女性初の高市政権が誕生したことがまずあげられる。これまでアメリカの「庇護」のもとで誰かが守ってくれるという「傘」の中にいた日本だが、迷走トランプ政権のせいでようやく目覚め始めた感がある。自分の国は自分で守る。発足間もない高市首相の「存立危機事態になり得る」発言が物議をかもした。台湾有事を日本有事と連動解釈し、中国政府を激怒させた。あくまで可能性として述べたのが現実的な発言のように解釈されてしまった。言語学で言えば、条件節（「たら、れば、と、なら」節）と時間節「とき」節の使用の解釈であろうか。言語研究者はこの発言をどうとらえたのだろう。世界は情報戦、認知戦の渦中にあるというが、ひとつの言説、発言が紛争の引き金になる可能性があることの証でもあった。認知戦は言語認識戦でもある。人文科学の研究者たちは、歴史学者のみならず、この実態を看過、軽視すべきではないだろう。

さながら、世界は将棋盤、碁盤のごとき攻防戦で、一部の独裁政権によって各国は駒か碁石のようにあつかわれ翻弄される。弱肉強食の世界だ。学問研究はこの潮流に加担することがあってはならない。国防、安全保障認識についても全方位的な認識、議論が求められる。新世紀人文学研究会は、こうした時代認識の上に立って、これからも国際的視野に立ち、学際的研究を進めていきたい。

新世紀人文学研究会代表

釜山の風に響く若者の声と未来を照らす問い

酒井順一郎

(九州産業大学)

毎年5月、私のゼミは釜山にあるA大学を訪れており、今年でその交流も3年目を迎える。日韓両国の社会状況や文化について学生同士がプレゼンを行い、討論するという学術的で率直な意見交換の場だ。毎年ながら学生たちの言葉から、その時々の社会の空気が鮮明に伝わってくる。

ご存知のように釜山は港町として知られるだけでなく、朝鮮戦争の際には臨時首都として国を支えた都市でもある。戦火を逃れて全国から多くの難民が流入し、人口が急増した。その記憶は、現在の整備された街並みの中にも静かに息づいている。山肌に沿って広がる住宅地や複雑な路地、街角の小さな祠や記念碑などに、当時の人々の暮らしの痕跡が刻まれている。また、独特の地形と海辺の風景から、釜山は韓国映画の撮影地としてもよく使われる。歴史と映画の文化が同居しているのであった。

学生たちが語る現実は、その風景とは対照的に重かった。特に印象的だったのは徴兵制である。徴兵は男子学生に直接的な義務としてのしかかるが、その影響は女子学生にも及ぶ。男子学生が約1年半の軍務に就く間、学びは中断され、キャリア形成は遅れる。女子学生はその現実を身近に見つめながら、恋人や友人が突然日常から消えるような感覚を抱えるという。会えない時間の長さ、生活リズムの違い、将来への不安が積み重なり、徴兵中の恋は儚く終わることも珍しくないという。

こうした重い話題が続く一方で、反日の雰囲気がほとんど感じられなかった。韓国人学生は日本文化に親しみ、日本の大学や企業への関心も高い。政治的問題とは別に、若者同士の距離は驚くほど近く、むしろ「同じように将来に不安を抱える隣国の学生」という共感が会話の基調をつくっていた。

とはいっても徴兵を終えても未来の保障はなく、大卒でも就職が厳しい。これは彼らが繰り返し口にした現実だった。また、少子化が進む中で大学も生き残りに必死で、海外の高校と連携し、早い段階から留学生を確保しようとする動きが強まっている。

さらに、韓国では「外国語だけ学んだ大学生の価値が下がっている」という現実もある。企業は語学力だけでは採用せず、ITスキルやなど複合的な能力を求める。外国語学部の学生は「外国語はAIが翻訳する。語学だけでは戦えない」とどこか影を落とした声でつぶやいた。

日韓の学生間の討論では、韓国側の学生が社会問題を自分事として捉え、将来への危機感を背景に鋭い問いを投げかけてくる。その姿勢は日本の学生にとって刺激であり、自分たちの学び方を見直す契機にもなったのではないだろうか。

交流会の後、我がゼミ生の多くはため息をつきながら「日本での生活がどれほど恵まれているか実感した」と口にした。両国の比較の中で改めて強く「幸せ」を実感したのであろう。帰国便の中、釜山の風と学生たちの真剣な声の余韻に浸りながら、今度はどの国へ彼らを導けば、また新しい問い合わせが生まれるだろうかと、私はゆっくりと思いを巡らせていた。

戦前・戦中のタイにおける日本語普及 ——バンコク・チェンマイ・コタバルの日本語学校の実相——

山口雅代

(東京福祉大学)

2016年に刊行した『戦前・戦中のタイにおける日本語普及と諜報工作—チェンマイ日本語学校とインパール作戦』(大空社)において、チェンマイ日本語学校の学習者の聞き取りから日本軍の通訳だったこと、資料からバンコク日本語学校のビルマ人学習者が南機関(1941年2月1日ビルマ独立援助とビルマ・ルート遮断のため設立)のビルマ独立義勇軍に参加していたことなどに言及した。その後、調査対象が台湾やマレーシア・クランタン州コタバルに広がった。というのも、チェンマイ日本語学校の学習者から日系企業で働くタイ語を流暢に話す台湾人にも日本語を習ったとの証言や、コタバルにバンコク日本語学校の分校が置かれていたからである。なぜ台湾人が日系企業で働きタイ語が話せたのか、コタバル日本語学校はどこにあったのか、これらの疑問が浮かび調査した。

台湾調査において、台湾総督府が台湾人青年を商業(実業)実習生としてタイに派遣する事業を行い、日本商社や台湾商社で働かせていたこと、派遣された台湾人の中にはタイ語ができ日本軍の通訳をしていたことがわかった。チェンマイ日本語学校学習者が述べた台湾人はその実習生だった可能性が出てきた。それ以外にも台湾総督府からバンコク日本語学校へ教科書が送られていたこと、バンコク日本語学校学習者が日本への視察中に台湾に寄っていたこと、バンコクの主要な新聞3社が台湾経営だったことなど、タイと台湾の強固な関係が見てとれた。

コタバル調査において、コタバル日本語学校は Sultan Ismail College (SIC) の前身、Ismail English School (IES) に置かれていたことがわかった。IES は、1936年に Sultan Ismail 陛下の名にちなみ設立された公立の英語学校であった。日本軍は、1941年12月8日にコタバル上陸後、1942年2月にマレーを占領すると、日本語教育を強要、英語学校 IES を閉校、日本語学校として開校させた。1943年7月にタイ領割譲の声明が出され、タイ領となったクランタン州コタバルの日本語学校はバンコク日本語学校の分校となったが、戦後 IES に戻り、1954年に SIC と名称を変えた。現在の SIC は、選択科目として日本語教育(週2時間程度)が導入されている中等教育機関(男子校)である。

このようにタイの日本語普及(日本語教育政策やメディア等含)が台湾・マレーシアを結び、政治的・軍事的機能を担っていたことを示してきた。しかし、これらは聞き取りや資料の断片を照合した結果で、正式な資料が存在する訳ではない。特に機密性の高い諜報工作に関する日本側の資料は日本軍により焼却され残っていない。各国に残った資料を探すにも、関係者の多くがすでに故人であることや、南タイとコタバルの国境に「渡航中止勧告」が常に出され容易に行き来できることなどが、調査を難しくさせている。今後は、少しでも残存する資料を探し、整理・保存できればと考えている。2025.11.10

なお、ここ数年の調査研究については、『新世紀人文学論究』に随時掲載している。ご参照いただければ幸いである。

在英25年目に思うこと

石橋教行
(英国ロンドン在住日本語教師)

私の住むロンドン・ホルボーン地域はブルームズブリー・グループ（ブルームズベリー・グループは、1905年から第二次世界大戦期まで存在し続けたイギリスの芸術家や学者からなる組織）が住んでいた町でもあります。ブルータッグという青色の丸い記章が付いた家があちこちに見え、ちょっと行くとチャーレズ・ディケンズの旧居が博物館になっています。かつては貧民街で、ディケンズの救恤院跡も残ります。家のドアの右上にもブルータッグが付いていて、「ドロシー・セイヤーズが住んでいた」と記載。週に何回か町歩きの集団が家の前でガイドさんから英國作家の偉大な業績を聞いているところに、私がドアを開けて顔を出すと、おや、という顔をされる気がします。家の角にはパブがあり開店前は一ヶ月強の間、侵入者に不法占(Squatt)されました。左に曲がると商店街があってここはおしゃれなラムズコンデュイット・ストリート。男性用高級ブティックが連なり、超高級眼鏡店もあります。高級チーズ専門店はイタリア人、その向かいはミドルイーストのカフェですがユダヤ人経営でガーディアン紙にも掲載。そのとなりのワイン専門店と向かいの高級レストランはイギリス人経営、懷具合のいい時に贅沢気分が味わえます。並びのベトナムカフェは人が入ませんが、北に50メートルの角のイタリアンカフェは安くて手早く食べられるので昼は医療関係者で一杯です。春先にはレバノンカフェが開店し、こちらも賑わっています。covid以来どの店も医療関係者向けの割引サービスが続いている。通りには歯医者、内科医院、薬屋、ついでに葬儀屋も並んでいて、家から一分という便利さ。葬儀屋がイギリス人らしいことを除けば、ほぼインド系のようです。イタリアンカフェの角を曲がると小児科の国内最大拠点 Great Ormond Street Hospital が巨大な敷地を占めています。そこで働く医療者は過半が移民。その向かいのカウンシルハウス（低所得者用団地）の住人はエチオピア人、パキスタン人です。

病院前を通って、西安のビヤンビヤン麵の路地を抜けると、ラッセル・スクエア公園が控えます。裏手は大英博物館とロンドン大学 SOAS ですが、この公園はほぼ毎月敢行されるガザ虐殺抗議のデモ出発地の一つでもあります。歩いて5分ということもあり、欠かさず参加するよう心掛けていますが、前々回は30万人集まりました。行進はたいてい首相官邸があるダウニングストリートか、テムズ河を渡った南側にあるアメリカ大使館が終点です。さて、私は一人。30万人の中で、一言も周囲の人と会話しないで三時間歩き続けるのは、ちょっとした苦痛です。労働党政権は、genocide の共犯者で、武器供与を続けるばかりか、昨年からジャーナリストの逮捕を繰り返し、ICC主任検察官を脅迫し、また抗議グループの一つをテロ団体に指定。逮捕されると裁判なしに三年間拘束が続き、有罪となれば20年の投獄が待っています。逮捕状なしにすでに3千人近い人々が拘束されました。被逮捕者の中心は基督教牧師、年金生活の高齢者や障害者です。これが英國のテロリストの実態です。日本のスパイ防止法は英國でみごとに運用されています。2025.11.24

日系インドネシアとの出会いと学び

伊藤雅俊
(日本大学)

私は、残留日本兵をルーツとする日系インドネシア人に関する研究に携わっている。戦後、自らの意で帰還しなかった、あるいは帰還できなかった残留日本兵は現地の女性と結ばれ家庭を築き、彼らが日系インドネシア人一世となった。

2006年に民族誌調査を開始して以来、多くの日系人との出会いがあった。出会った人々から学んだことは、研究のための情報や知見にとどまらず、残留日本兵の子孫たちから人として大切なことを数多く教えてもらった。日本人である私を温かく迎え入れ、愛情をもって接してくれた人々も少なくない。嫌な顔ひとつせず調査に付き合い、真摯に向き合ってくれた。

ここでは、日系二世男性の Sato 氏との出会いと別れについて述べる。同氏との出会いは 2008 年 9 月、北スマトラ州の福祉友の会メダン支部であった。福祉友の会は、日系インドネシア人の親睦と相互扶助を目的とした組織である。その後、メダンを訪れるたびに Sato 氏から貴重なお話をうかがい、有意義な時間を共有させてもらった。

東日本大震災の翌朝、Sato 氏から電話が入った。同氏はまず「伊藤さんの日本のご家族は無事ですか」と気遣い、「それは良かった」と続けたうえで、次のように語った。「若ければ被災地に駆けつけ、日本人を助けることもできるが、体力的にそれは難しい。こんな事態が起きてしまい、私たち日系インドネシア人に何ができるのかを考えている。伊藤さんの考えも聞きたいので、すぐにそちらへ向かう。」

当時メダンに暮らしていた私の自宅に到着した Sato 氏の臉は腫れ上がっていた。日本人が苦しんでいることを思い、また自らに何ができるかを思い巡らせ、ほとんど眠れなかつたという。その日、Sato 氏の車で日系人宅を訪ね、彼らの日本に対する熱い想いを聞いた。

Sato 氏は 2022 年 5 月に逝去した。別れの言葉を伝えられたのは同年 8 月であった。Sato 夫人の案内で、Sato 氏の眠るムスリム墓地を訪れ、献花と草むしりを行った。夫人は語った。「我々には娘たちがいるけれど息子はいないでしょ。だから、夫は伊藤さんことを息子のように思っていたのよ。」私は「さようなら」と述べた瞬間、自然に涙が溢れ、その後に発した「来年もお墓参りに来ますから。お元気で。」が夫人にどのように伝わったかは定かではない。

この文章を執筆している最中に、Sato 氏のある日の言葉を思い出した。
「私はお父さんや日系人のことを語ることはできます。しかし、文章を書くのは苦手なんですね。書くのは伊藤さんに任せましたよ。」

2025. 12. 21

第2回兒嶋文庫開所一周年記念研究報告・交流会に参加して

田中 寛

(新世紀人文学研究会)

昨年に続いて、故兒嶋俊郎氏の足跡をしのぶ研究報告・交流会に招かれ、参加した。会場は昨年同様、埼玉県入間郡毛呂山町にある SCAT セミナールーム毛呂山分室。プログラムは以下のようであった。報告者は松村高夫氏のもとゼミ生、同僚の研究者の方々である。敬称略。

10:30より午前の部

報告1 「社会経済史・社会史研究で今後求められていること」

報告者：松村高夫（慶應義塾大学名誉教授、研究会代表）

報告2 「中国共産党の成立と日本の役割——近著『中国革命論における民主主義と社会主義』をめぐる一所論」

報告者：江田憲治（京都大学名誉教授）

13:15より午後の部

報告3 「日本人戦犯裁判とフランス」

報告者：難波ちづる

報告4 「2つのロサンゼルス暴動：1992年と2025年」

報告者：松本浩子

報告5 「近代日本は、なぜ満州侵略を拡大したのか」

報告者：柳澤遊（慶應義塾大学名誉教授）

いずれも密度の高い研究発表であった。報告1では、「社会経済史の継続に意義はあるのか」との問題提起を受け、戦前日本のマルクス主義研究の二つの潮流、すなわち講座派と労農派の足跡を検証、また「ピエール・ノラたちの宣言『歴史のための自由』は『自由のための歴史』を放棄したのか」との言説を再考察した。イギリス労働史から731部隊社会構造史にいたる報告者の研究姿勢が随所にうかがわれた。報告2は私にとって関心がもたれたのは、著書の副題にあがった陳独秀、瞿秋白、毛沢東のほかに中国共産党の設立者の一人、李大釗の名がなかったからである。報告者は陳独秀の研究者でもあるが、李大釗の足跡をどう捉えるかは、現政権にとってもナイーヴな問題ではないか、と質問したのである。愛国主義運動と言えども現政権への批判があつては都合が悪い。魯迅も五四運動も現政権の政治路線に合わせるかのように修正評価される可能性がある。魯迅も五四運動も絶えず研究されるゆえんがここにある。対日批判が強まれば日本留学さえ過小評価、いな否定されないと限らない。中国の人民概念の成立は、マルクス主義の中国的受容過程と密接に連動する。人民、大衆意識は時代とともに変化する。中国は「国民感情のコントロール」をどう構築してきたのか。そして修正に修正を、改良に改良を重ね、より先鋭していくのか。注意深く見守る必要がある。報告3では太平洋戦争期の非軍政下にあった仏印駐留の日本軍の顛末である。戦争犯罪、戦争責任については、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ビルマ（現ミャンマー）など軍政下の実態究明が進んでいるが、本報告ではこれまでほほ

論じられることのなかった仏印の戦後処理問題の実態を明らかにしている。報告4は報告者の二つの暴動の背景をわかりやすく説明し、アメリカのもう一つの病理=人種差別の混迷を浮き彫りにした。報告5は近年の日本における満洲研究を紹介し、今後の研究のあり方を示唆するものであった。戦後80年、そして昭和百年の区切りの年、満洲侵略から開拓団の入植、満洲国の建国とは何だったのか。まだ多く解明すべき問題が残されている。今後もこの自由闊達な研究会が継続されることを期待したい。

新刊のお知らせ

《新世紀小説叢書》第3弾!!

八十路ゆく日々

大嶋岳夫 著

並製 四六判 265頁 定価1,000円（税込）別途送料210円

『未明の丘』、『倒木蘇生』、『我ドン・キホーテとゆく』につぐ、四作目の作品集。表題作の「八十路ゆく日々」他十二篇の短篇を収める。人生の途上に遭遇するさまざまな感情の起伏を洗練された文体と表現でつづる珠玉の短篇集。

★収録作品——敷下通り 女貞子 本牧亭夜話—瀬川とはるか 本牧亭夜話—は組小町 我がヰタセ クスアリス 色即是空、過ぎ越し日と人と 墓穴—川瀬 という男 峠越え 孤影のあす 銀杏よ 八十路ゆく日々

緑の葉を一葉とてつけていない並木に、私は呼びかける。

——さびしかないか、骨ばかりの木よ。君らにひきかえ私は花をつけているぞ。幼いころの妻を引き連れているぞ

視力を失いかけている妻は私をぼんやり目にしたことだろう。眼を細めて窺い見ていた。目線の一点に、私の肩のあたりだけが映ったのではないか。

（「八十路ゆく日々」より）

志賀直哉先生に師事しその後は遠藤周作先生にお教えいただいた。六十年を振り返って思うことは、いったん筆を折るまでに取り組んだ創作には濁りがなかったということだ。書きたいことに正面からぶつかっていた。（「あとがき」より）

★著者プロフィール——作家、北海道出身、1942年生まれ。「未明の丘」で北海道文芸賞選考委員特別賞受賞。「父よそして母よ」で農民文学賞受賞。創作集に『未明の丘』（文芸社）、『倒木蘇生』（鳥影社）、『我ドン・キホーテとゆく』（私家本）がある。

書店では扱っていません。ご購入お問い合わせ先



〒353-0005 埼玉県志木市幸町1-7-17

亜細亜綜合企画工房 田中 寛

TEL 08053787543 hiroshitanaka724@gmail.com

◆著者からの受領図書：謹んでお礼申し上げます。

- (1) W・H・オーデン、太田雅孝訳『アキレスの盾』 水声社 A5判 213頁
- (2) 太田雅孝『太田雅孝詩集 裏木戸』待望社 A5判 94頁

(1)は、孤高の詩人、オーデンの詩集である。英文学研究者の長年の研究の蓄積が、詳細な註解に結実

している。解説も丁寧で、オーデンが、9. 1 1の時も反戦詩集として再読されたことを述べているが、いまた混迷の時代に脚光を浴びようとしている。

(2)は、詩人太田雅孝の日常を透徹した感性で綴った詩集。すぎさった時空間をふと振り返らせてくれる。この郷愁はいったい何だろうか。そして、人生には表と裏があるように、裏木戸という記憶がひとつそりとそれぞれの生に息づいていることを教えられる。

編集後記

音楽通でもないのだが、最近、アーティスト井上陽水の歌が心に沁みる。「傘がない」だ。
1972年にポリドール・レコードからリリースされた。

都會では自殺する若者が増えている
今朝来た新聞の片隅に書いていた
だけども問題は今日の雨 傘がない
行かなくちや 君に逢いに行かなくちや
君の家に行かなくちや 雨に濡れ

この曲が流れた時、衝撃的だったことを覚えている。1972年といえば、さまざま思いこされるが、大事件の一方で、人々は安逸な暮らしに暮れていた。日中国交回復があろうと赤軍事件があろうと、日々の儂しい暮らしこそが優先だった。そして、あれから50年がたち、「傘がない」。

雨傘ではない、「核」の傘だ。今まであると思っていたのは幻想だったか、と。その一方で「コメがない」。あってもばか高い。なぜそうなったのか、令和の米騒動の背景、根元には何があるのか。単なる替え歌ではすまされない、「Xがない」という切実さが増殖する世界だ。現実と非現実、戦争と平和、真実とフェイク、……もろもろの谷間に私たちは棲んでいる。行かなくちや、何処へ？

『通信』第4号をおとどけします。ご多忙のところ、記事をお送りくださいました各位に感謝申し上げます。今号も多岐にわたる、読み応えのある研究事情を綴ったエッセイをいただきました。委員の方をはじめ、会員皆様の近況をお伝えし、交流の場としたいと思っています。引き続き、皆様のご研究の成果、人文科学の学術情報も随時お待ちしています。『通信』はホームページにもアップされる予定です。なお、研究会誌『新世紀人文学論究』第10号、文芸研究誌『人間にとって』第2号は、それぞれ2026年2月に刊行予定です。

新世紀人文学研究会へのご入会をお勧めします。会費は無料、会員はどなたでも投稿が可能です。ぜひ、ホームページをご覧ください。<http://shinseiki.net/>

(編集：田中寛)

